

## 〈小特集…古今集一一〇〇年によせて〉

●特別寄稿

### 古今和歌集奏覧一一〇〇年・新古今和歌集

#### 奏覧八〇〇年記念切手発行の裏話

兼築 信行（早稲田大学教授）

二〇〇五年を「古今集・新古今集の年」と呼ぶことに決めて、さまざまな記念イベントを仕掛けていたのは、和歌文学会という学会である。和歌文学会は、約千百名の和歌研究者が会員となつて運営されている学会組織であり、年九回（東京六回、関西三回）の例会（通例は三本の研究発表が行なわれる）と、秋に大会を開催するほか、機関誌『和歌文学研究』を年二冊発行するなど、たいへんに活発な研究活動を展開している。

和歌文学会の事務局は、二〇〇二年十一月から二〇〇四年十月まで、早稲田大学の私の研究室に置かれていた（現事務局は駒澤大学）。その委員会の席上で、古今集成立千百年、新古今集成立八百年となる二〇〇五年に、和歌文学会としては何もしなくてよいのですか？と言い出したのは、お茶の水女子大学の浅田徹氏であった。それ以後、言い出

しつぺの浅田氏を中心に、各方面へ記念イベントの実施を働きかけることになった。関連展示・講演会・講座等の開催や、書籍の刊行、雑誌特集など、盛りだくさんの企画が生まれた。折しも二〇〇五年は、和歌文学会の創立五十年にも当たっており、こもごも意義の深い記念年となったわけである。



二〇〇五年九月一日に、「古今和歌集奏覧一一〇〇年・新古今和歌集奏覧八〇〇年記念切手」が発行された。この切手発行のアイデアは、そもそも私の発案による。和歌文学会の委員会で、記念切手を出そう、記念切手を出そうと連呼した時、他の委員は皆呆れ、まともに取り合ってもらえ

なかった。ところが、委員会が開かれる度毎に、しつこく主張するうち、日本郵政公社から文部科学省を経由して、二〇〇五年に記念切手を発行すべき文化的に意義ある事項があるかどうかについて国文学研究資料館に問い合わせがあった際に、松野陽一館長（当時）が、古今集・新古今集の記念切手を提案してくださり、それが首尾よく、採用と相成った次第である。

図案について私は、紀貫之の切手は既に発行されている（一九九三年、国際文通週間）から、古今集は小野小町で決まりであり、新古今集は、藤原定家か後鳥羽院がよいと考えていた。小町は、佐竹本三十六歌仙絵巻の画像がある（佐竹本の歌仙絵は、貫之と小大君の切手が一九九三年に出ている）。藤原定家は冷泉家時雨亭文庫蔵、後鳥羽院は水無瀬神宮蔵のそれぞれ有名な肖像画がある。和歌文学会の委員会で図案のことが話題になった時、古今集を小町とすることに異論は出なかったが、新古今集に関しては、冷泉家蔵の定家肖像は気持ち悪い、やはり入集第一位の西行だという意見が大勢だった。なるほど、西行には、絵巻類をはじめ画像がたくさんあって、よりどり、みどりだろう。ただし心の中では、私自身研究対象としている定家の切手が発行されることを、切望してやまなかったのであるが……。

続いて思いが及んだのは、昨今盛んな「ふるさと切手」の発行である。私は島根県松江市の、お城のすぐ下に生まれ育った。島根（出雲・石見・隠岐）は和歌にゆかりの深い土地柄である。古今集の仮名序には、シタテルヒメの詠とスサノオの詠が和歌の起源だと書かれている。シタテルヒメはオオクニヌシの娘で、出雲を帰順させるために高天原から派遣されてきたアメワカヒコの妻となり夫を懐柔してしまう。アメワカヒコは、高天原から落とされた矢に当たって死ぬが、その葬儀の折に、シタテルヒメの兄アヂスキタカヒコネが、死者と間違えられて怒ったのを静めるために詠んだという夷振（ひなぶり）の歌が、天上の和歌の始まりとされる。また、スサノオがヤマタノオロチを退治して、クシナダヒメと結婚するため宮作りをした折に詠じたという歌、

八雲立つ 出雲八重垣

妻籠めに 八重垣つくる その八重垣を

が、地上における和歌の始まりとされる。このように出雲は、和歌の始原に深くかかわっている。

万葉集随一の代表歌人といえば、柿本人麻呂であろう。人麻呂には石見相聞歌があり、石見で死んだという伝承がある。梅原猛の『水底の歌』が話題になったのはもう三十

年以上昔のことだ。それから、新古今和歌集の撰集下命者後鳥羽院は、承久の乱に敗れて隠岐に配流となり、かの地で崩御している。石見も隠岐も、大歌人にゆかりの地に間違いはない。

スサノオとクシナダヒメ、人麻呂と後鳥羽院の肖像画を凶案とする「ふるさと切手」を、和歌の記念年である二〇〇五年に島根県で発行できないものかと考えた。スサノオとクシナダヒメの画像は、松江市佐草町の八重垣神社に、南北朝期といわれる社殿壁画がある。人麻呂像はいろいろあるし、後鳥羽院は前述の水無瀬神宮蔵の肖像、それがダメなら天子撰御影などが使える。

島根県東部、出雲地域から東京圏の大学への進学者と、そのOB・OGで組織されている、東京出雲学生会という親睦団体がある。なんと百二十年以上の歴史を誇る会なのだ、その会合には、島根県東京事務所の所長さんも出席される。その機会をとらえて、「ふるさと切手」の企画をもちかけてみた。所長さんは関心を示されて、機会があったら本庁に伝えてみましょうと言ってくれたが、どうやら沙汰やみになつたらしい。

人麻呂といい後鳥羽院といい、死去や配流にかかわる点は、いささか縁起が悪い、ということなのかもしれない。「和歌のふるさと 島根県」というキャッチフレーズは、観光立県を重視するわが郷里にとって、悪くないように思う

のだが、もしかすると、いろいろと差しさわりがあるのかもしれない。島根県出身の政治家が総理大臣になると、天皇が崩御するという偶然（若槻礼次郎、竹下登）は、冥界の主オクニヌシの鎮まる出雲の国らしいジンスクスではあるが、凡慮の及ぶところではない。あなかま、あなかま。

「古今和歌集奏覧一一〇〇年・新古今和歌集奏覧八〇〇年記念切手」が発行されることが決まり、その凶案が小町と定家の組み合わせになったことは、意中の原案が実現したことになる私にとって、まことに喜ばしい結果となった。そして、浅田徹氏から、そのポスターが送られてきた。小町は東京国立博物館蔵の六歌仙図（土佐光起筆）、定家は同館蔵の新三十六歌仙図帖（狩野探幽筆）より、それぞれ肖像が採られている。近世の歌仙絵となった点は、最初少し違和感を覚えたが、これはこれで、明るく美しい切手だと思つた。浅田氏からは、どうしても国の所蔵品を使うことになったというような説明を受けた。後で松野陽一先生に伺つた裏話だが、凶案の決定に当たっては、松野先生と浅田氏が郵政公社に呼ばれたのだそうだ。検討の結果、郵政公社の副総裁の裁定というか、鶴の一声で、光起・探幽の歌仙絵をデザインしたものに決まったとのことである。顔が前の方を向いていなければならぬ（佐竹本三十六歌仙絵巻の小町像は後ろ向き）などの条件があつたらしい。

記念切手は九月一日に発行された。シートの構成は、八十円切手横二枚、縦五枚の十枚で、オフセット六色。切手デザイナーの星山理佳（あやか）さんのデザインによる。左の縦列が小町で、

花の色は うつりにけりな

いたづらに わが身世にふる ながめせしまに

（古今和歌集・巻第二・春歌下・一一三）

にちなんで花（桜）のデザインを配する。右の列は定家で、

見渡せば 花も紅葉も なかりけり

浦の苫屋の 秋の夕暮れ

（新古今和歌集・巻第四・秋歌上・三六三）

にちなみ、紅葉のデザインが配されている。小町の背景はピンク、定家は明るいグリーンで彩られており、なかなか洒落ている。

発売日の九月一日には、オーストリアのウィーンで開催された学会で研究発表を行うため、私は日本にいなかった。家人に二、三シート買っておいでくれるよう頼んで発売し

たが、帰国後、九月五日になって、早稲田の馬場下郵便局で追加購入しようと尋ねたところ、もう売り切れたという。あわてて自宅近くの小さな特定郵便局で手に入れることができたが、局員さんに評判を聞くと、上々とのこと。まづはよかった。通信販売は十月初めまで受け付けていたから、大きな郵便局に行けば入手できたのだろうが、もっと大量に出回ってもよいのではないかと思った。

以上が和歌をテーマとした記念切手発行の顛末である。和歌はたしかに日本文化の歴史を貫く太い軸をなしている。切手の意匠にもっと採用されてもよいはずだが、そう簡単にはいかないのだろう。次にこのような切手が発行される可能性のある機会は…と考えると、小倉百人一首の記念年であろうか。百人一首の成立には謎が多いが、藤原定家の日記である明月記の、文暦二年（一一三五）五月二十七日の記事が、その成立に深く関わる史料とされている。二〇三五年を「百人一首 八〇〇年」の記念年として、光悦かるとの歌仙絵か何かで、百枚セットの記念切手を発行しようという大運動を、今から周到に準備すれば、もしかしたら実現できるかもしれない。ひどく遠大な話ではあるが…。

#### 【参考】

和歌文学会ホームページ <http://www.soc.nii.ac.jp/waka/>